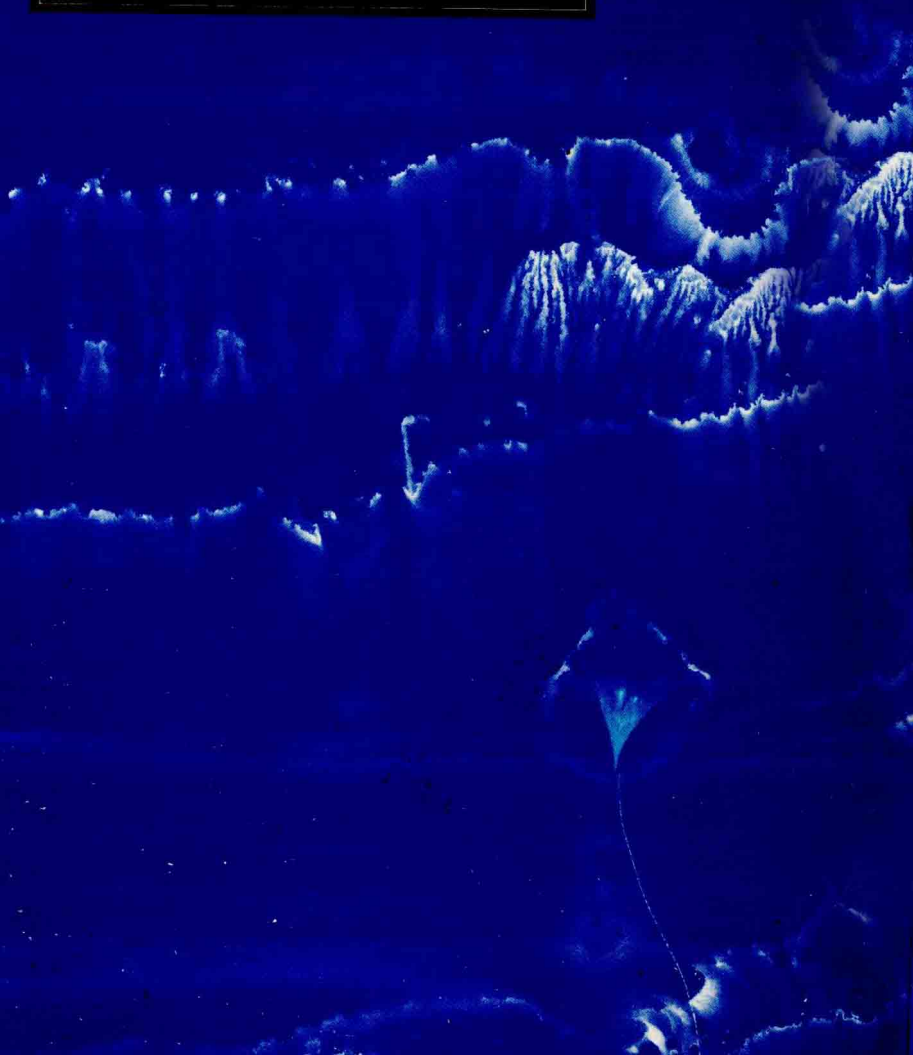


シュルレアリスムよ、
さらば

飯島耕一



シュルレアリスムよ、さらば

飯島耕一

小沢書店

シュルレアリスムよ、さらば 定価1600円

昭和55年 5 月20日 初版発行

著 者 飯島耕一

発行者 長谷川郁夫

発行所 株式会社小沢書店

東京都千代田区富士見 2-5-12 Tel(03)263-9218

印刷 凸版印刷 製本 大口製本

©K. Iijima, 1980

Printed in Japan

シュルレアリスムよ、さらば 目次

I

終ったもの終らぬもの

11

II

軽い羽毛は重い石——オクタビオ・パスの詩論にふれて

57

彼方を見つめるタンギーの視線

60

ランボーとけものたち

69

ラフォルグの水族館

74

三十八年目のアメリカ映画

80

ヴィスコンティの『妄執』をようやく観る

85

III

詩の「文体」

93

詩の状況はどうなっているか

103

海に沈んだ軍艦のイメージからはじまって——全詩をまとめる

110

朔太郎とニーチェ

113

サカナカトカゲ——犀星の詩

118

西脇順三郎解説

127

瀧口修造『物質のまなざし』に寄せて

149

伊藤信吉『上州』の諧謔

152

佐沼兵助氏の鬱屈——寺田透『無名の内面』

154

永田助太郎の詩的速射砲

158

詩人と飢人——長谷川龍生論

162

廻廊は貝楼なのではあるまいか——渋谷孝輔論

177

白石かずこの『今晚は荒模様』をめぐる

195

非存在へのノック——吉増剛造論

203

IV

蛇格について——蛇笏小論

217

青邨を読んで

221

生活の歌——宮柊二論

230

V

『夢喰ふ虫』のお久

245

堀辰雄への違和感

254

女のセリフが安吾の思想

261

大岡昇平の「沼津」ほか

266

妄想の小説——『死霊』読了の報告

272

アルコールの霧の向うの風景——吉田健一の小説

276

吉行淳之介の『夕暮まで』

283

野坂昭如の小説をはじめて読む

286

阿部昭の短篇

293

阿部昭の『過ぎし楽しい年』

296

作者の自由——坂上弘『優しい人々』

300

富岡タエレナイコ

305

富岡多恵子の小説をほとんど読んだこと

312

あとがき

319

装
画
司
修

シ
ュ
ル
レ
ア
リ
ス
ム
よ、
さ
ら
ば

終わったもの終らぬもの

コラージュあれこれ

ジャック・ブレヴェールも死んでしまったのかと思うとやはりさびしい。やはり戦後は終わったのである。戦後のフランスの学生はサルトル派とブレヴェール派に分れたと言われるが、この両者は日本にも上陸した。日本国ではサルトル派の圧勝であり、ブレヴェールのファンは少数だった。

ブレヴェールを日本に上陸させた最大の功労者は、裕伊之助を別とすれば、何と言っても小笠原豊樹（岩田宏）である。彼が昔のユリイカから訳して出した『ブレヴェール詩集』はすばらしいものだった。薄っぺらな本だったが、われわれはこの本を実に何度も読んだ。あの詩集の読者が日本のブレヴェール派ということになる。

もう一つ、ブレヴェールは日本の映画館にやってきた。彼は主としてマルセル・カルネ監督

（ああ何となつかしい名であることか！）と組んだシナリオライターで、『霧の波止場』『悪魔が夜来る』『天井桟敷の人々』などのシナリオやダイアログを書いた。

あとは「枯葉」などのシャンソン。プレヴェールの詩と意識せず、多くの人がプレヴェールの詩を口誦んでいたわけだ。

このプレヴェールがコラージュを作っているということは大分あとになってぼくは知った。『イマージュ』という大判の黒い表紙のプレヴェール・コラージュ集を買ったのは、十二、三年も前のことだったが、人にやったらしくいまは手もとにない。

意外にドギツイ、動物的になまなましいものだとの第一印象があった。やはり遊牧民族、肉食人種の後裔の製作物である。われわれ好みに淡泊でさらっとしているという風には行かない。『ファトラ』という詩集にもコラージュが入っていた。

そのプレヴェールのコラージュとアフォーリズムのたくさん入った本、『想像力の散歩』が、粟津則雄訳で、新潮社の創造の小径叢書の一冊としてこのあいだ出た。「世界の創造」という、偉大な顔をした猿を中心にして、左右に異様な顔（やはり動物風）をした人物を配し、その三者が大海の上方に浮んでいるという図柄のこのコラージュは、以前にも見たことがある。一度見たら忘れられない強烈なものである。その他つくり手自身が、ノリでいろいろなイメージを貼り合わせながら、ぞっとしただろうような恐怖のイメージがある。

去年（七七年）の十二月はじめ、渋谷のバルコであった木村恒久の『ヴィジュアル・スキヤンダル原画展』を見に行ったのは、これらプレヴェールのコラージュの影響だったろう。木村恒

久という人をぼくは知らなかったが、昭和三年生、美学校（現代思潮社主催）講師、一九六九年から、主にフォト・モンタージュによるヴィジュアル・スキャンダルを発表してきたというから、もう十年近くこの方法でやっている人らしい。

バルコの六階というところへはじめて行ったわけだが、これが現代風というのかまず会場が物珍らしかった。ロックが高鳴るレコード売り場があり、ガラス張りの美容室があり、コラージュはその側の屏風のようなパネルに二、三十点並べてあった。ニューヨークの摩天楼とナイヤガラの滝をコラージュしたのが、案内状にも刷ってあったが、やはり全体のなかでも代表的なものかと思った。ところで木村氏のコラージュはやはり淡泊な、植物的にあっさりしたものであった。コラージュには意外に正直にその人が出るものであろう。つくり手の民族性もまた、佐々木基一氏もコラージュをやると聞いたが、一体どんな作品だろうか。

馬の美術展

テレビを見ていたら、「宮古馬」が出てきて、ちょっと眼をひきつけられた。

この頃は南島、とくに宮古島のことは何でも気にかかる。去年（七七年）は一月と八月に、二度も宮古島へ行ったが、八月には宮古とその離島に六日間もいたので、島のあらゆるところを見て歩き、しまいには宮古の人にまで、離島はどんな具合かと質問される有様であった。

中心地の平良^{ひらら}の港付近の人のなかには、離島には行ったことのない人もいるわけだ。

この平良港のあたりで、荷馬車を何台も見て感激した。もう本土（と宮古の人は言う）では荷馬車さえ見られなくなって久しい。ヤマトの馬は一体どうなったのか。むろん農耕の馬もない。ただ競馬の馬だけがテレビの画像として勢よく走っている。

ところでぼくは一度も競馬場というところへ行ったことがなく、馬券さえ買ったことがないのだ。馬は退屈な日曜の午後など、テレビの競馬の時間で見ただけ、という情ない有様である。テレビでは高校でも大学でもぼくの一級下だった友人石川喬司の顔もときに見ることができる。ちなみに妻の姉は競馬の大ファンで、ぼくが石川喬司を知っているというので、いつか見直されたことがある。石川が贈ってくれる著書はこの姉にも見せてやる。

閑話休題。こういうわけで、一月にも八月にも宮古の平良港で荷馬車を見て、ぼくは実によいものだと思嘆したのである。

宮古の馬は足が短く、全体にずんぐりしている。顔が長く大きく、毛が多い。

一月の四日から十七日まで、東京日本橋の高島屋デパートで、『昭和戊午・新春・馬の美術展——東西先史から現代』というのがあって、ぼくはさっそく見に行った。今年はウマドシ——ぼく自身が昭和五年のウマである。「東京新聞」の大波小波によると、ウマドシ生れは調子者が多いが、賑やかで、年男の小説家や詩人は今年あたりががんばるがよい、ということであった。

会場に入っすぐのガラスケースのなかに、前十世紀、アゼルバイジャンの「馬の器」とい